

情報共有し細やかな支援

東日本大震災の被災地には、全国からボランティアが駆けつけている。泥出しや炊き出しに加え、生活支援や地域の復興のための支援も必要だ。まもなく夏休みのシーズン。ボランティアの力をどう生かしていくのか、課題を探った。

震災後—— ボランティアの力 ①

「地元の人たちの心のよりどころになっている『川開き祭り』の灯籠流しに協力し、おみこしも皆で担ぎましょう」

午後7時。宮城県石巻市の各地で活動していたボランティアリーダー約50人が、作業着のまま石巻専修大の一室に集まり、連絡会が始まった。

リーダーの一人から、石巻で毎年行われている夏祭りのボランティアの提案があると、「街に活気が戻るように応援することも大切な支援」と、

他のメンバーもうなずいた。

このグループはNPO、NGOが連携して発足した「石巻災害復興支援協議会」。3月20日から毎夜連絡会を開いている。「泥出しに200人参加」「写真の泥を洗い流す作業を継続」など、その日の活動を報告し、情報共有して効率的な支援を行うのが目的だ。

震災直後、一つの避難所で炊き出しが重なったり、逆に支援の全く届かない避難所が出たりした。そうした行き違いを繰り返さないよう、国際交流NGOピースボートや日本財団、医療や環境系の団体など、283団体が参加。同協議会会長の伊藤秀樹さんは、「情報を共有しているからこそ、細かいニーズにもすぐに応えられます」と話す。

＊

例えば、病院の看護師から「避難所の衛生対策が必要」という情報が協議会に寄せられ、複数の団体が協力してゴミ退治の活動を始めた。「ダ

毎夜連絡会、ニーズ変化に対応



ニを駆除する人たち」を意味する「ダニバスターズ」を名乗り、掃除機や乾燥機を持って避難所を回り、毛布のほこりを吸い取って乾燥させる。また、ペットボトルでハエの捕獲器を手作りし、避難所へも配っている。酢、酒、砂

ボランティアのリーダーが毎日開く情報交換会。活動が重なったり空白になったりした地域はないか、互いに確認できる(宮城県石巻市の石巻専修大で)

糖を入れた。ペットボトルに小さな穴を開けてハエをおびきよせる。もつれたカキの養殖網を手作業でほぐすボランティアもチームで行っている。

災害時のボランティアに詳しい、神奈川県立保健福祉大学学顧問の山崎美貴子さんは、「震災から4か月が過ぎ、被災地に必要な支援は、時間と共に多様化し変化している」と指摘する。当初はがれき撤去や泥出しなど「水害型」のボランティアが中心だった。

活動状況は、被災地によってばらつきがあり、不足している地域も多い。全国社会福祉協議会によると、岩手、宮城、福島県内の災害ボランティアセンターを通じて活動した人数の合計は、3日までで、のべ約51万人。1日あたりでは、3県で週末が50000〜70000人、平日30000人前後だ。被災地が広範囲で、首都圏や関西圏などから遠いことも影響しているようだ。

石巻市内で活動するボランティア関係者の一人は、「今後、復旧から復興へと関心が移りボランティアは必要ないと誤解されるのが心配」と漏らす。こうした声に山崎さんは、「災害ボランティアセンターを通じて活動する方法のほか、NPOなどが募集するボランティア派遣に参加することもできる。関心を持ち続けてほしい」と訴えている。

＊

もっとも、ボランティアの